2能力の両方が高い・低い生徒の割合

表2　両能力の平均以上・以下の割合

目標決定状況(人)	両方高い	両方低い
A (34)	23.5%	55.9%
B (53)	24.5%	47.2%
C (66)	51.5%	21.2%
D (15)	40.0%	20.0%

不明確

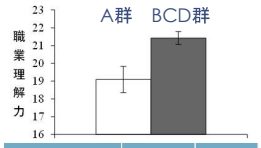
明確

自己理解と職業理解の両方が高い生徒の割合がD群よりも高い

A群とBCD群（少しでも目標あり）の比較

職業理解力

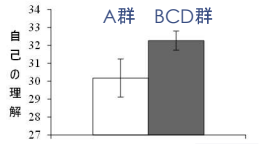
有意差あり



	M	SD
A群(34)	19.088	4.839
BCD群(134)	21.425	4.161

$F(1,166)=7.995$, $p=.005$
$R^2=.046$, $b=2.337$, $SE=0.827$,
$t(166)=2.828$, $p=.005$

自己理解力



	M	SD
A群(34)	30.176	7.305
BCD群(134)	32.269	5.908

$F(1,166)=3.077$, $p=.081$
$R^2=.018$, $b=2.092$, $SE=1.193$,
$t(166)=1.754$, $p=.081$

各群の傾向

- A群⇒職業理解・自己理解が進まず進路を考えられない生徒と、職業理解はしていながらも決定を先延ばしする生徒が混在
- B群⇒進路について考えたことはあるものの、具体的イメージを持つに至らない層
- D群⇒職業理解・自己理解を基盤に進路目標を決定している生徒と、就きたい職業・学びたい学問の決定が先行した生徒が混在

適性より憧れが先行

結果を基にした、主体的なキャリア発達に必要な力

- 教室で得る情報だけでなく、体験的な情報に触れて将来像を具体的にイメージする
- 到達への道筋を俯瞰して計画を立てることで、進路目標が明確になり、職業や自己理解が進む

自分や物事を俯瞰する力

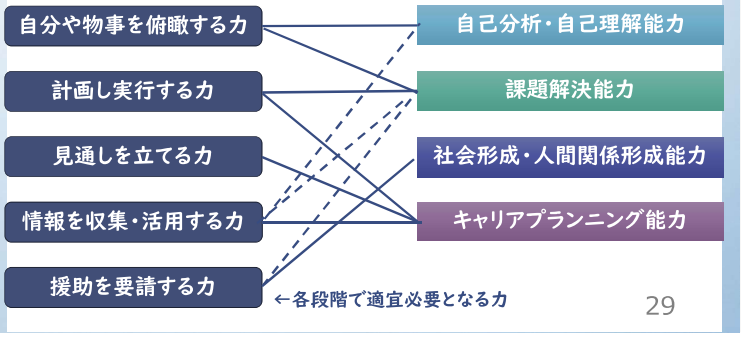
見通しを立てる力

計画し実行する力

情報を収集・活用する力

必要な時に適切な相手に援助を要請する力

「基礎的・汎用的能力」との関係



今後の実践上の課題

伴走的なキャリア・カウンセリング

日常生活や学びと夢や目標を繋ぎ、生き方の探索と自己決定を繰り返すキャリアガイダンス

- 面談における一定の枠組み⇒聞いて支援に繋ぐ
- 生徒が自己分析、教員が情報共有できるツール

⇒ A・B群をC・D群へ、C群をD群へ進めていくための支援
⇒ D群は本当に職業理解と自己理解ができているのか？

今後の研究上の課題

両輪がうまく回っているのか、効果検証のために、「基礎的・汎用的能力」の尺度を、さらに包括的なものとすることが課題

自己分析・自己理解能力

社会形成・人間関係形成能力

課題解決能力

キャリアプランニング能力

能力の獲得状況の「見える化」

【引用・参考文献】

三川俊樹・石田典子・神田正恵・山口直子(2017). 高等学校におけるキャリア教育・職業教育の効果に関する研究(3)―キャリアデザイン力尺度の信頼性・妥当性の検討―, 追手門学院大学心理学部紀要, 第11巻, 37-48.
文部科学省(2020). これからの高等学校教育について
文部科学省(2023). 学校基本調査（令和4年度）
西山久子(2014). Comprehensive School Counseling Programにおける Frameworkの検討Ⅰ～ミズーリ州におけるガイダンス・カリキュラムの構築を取り上げて～, 福岡教育大学大学院教職大学院教職実践専攻年報, 4, 201-208.
清水裕士(2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案, メディア・情報・コミュニケーション研究, 1. 59-73.